令和５年度　尚絅中学・高等学校

学校評価

（評価対象年度：令和５年度）

自己評価総括　令和５年度　尚絅中学・高等学校 学校評価

学校教育目標	
1	智と徳を兼ね備え、社会に貢献できる自立心豊かな近代女性の育成を目指す学校
2	尚絅で学んで良かったと生徒・卒業生・保護者が真に思う学校
3	地域で存在感のある学校

重点目標	
1	教育の質向上
2	品性があり社会に貢献し得る生徒の育成
3	生徒支援の確立
4	地域貢献の推進
5	個性豊かな生徒の獲得

自己評価総括のランクは、ＡＢＣの３段階とし、次頁以降の「自己評価」で２/３以上Ａ評価となった重点項目を「Ａ」ランク、２/３以上ＡまたはＢ評価を「Ｂ」ランク、それ以外を「Ｃ」ランクとしている。

重点目標に対する自己評価総括

1	教育の質向上	B	教育の質を向上するには、質の高い教育プログラムやカリキュラムの提供と力量の高い教師集団が日々の学校教育活動を通して、生徒たちの自己肯定感やリーダーシップ能力を育むことが重要であるため、本年度はコロナ禍の感染防止対策が緩和されたこともあり、姉妹校との交流をはじめ、海外からの数多くの交流団を受け入れて生徒のグローバル化を図るとともに、企業と連携した商品開発を行って販売するなど、探究活動の推進を行った。
2	品性があり社会に貢献し得る生徒の育成	B	本年度は、中学校、総合進学コース、特別進学コース、中高一貫コースそれぞれの生徒の能力や特性に合わせた支援や指導に力を入れたことにより、生徒自身が自己を理解し、知識を深め、見分を広げ、それぞれの進路実現（尚絅大学・短期大学部への進学者率は34%）を果たした。また高校では、生徒の進路意識の向上と進路実現のため、全学年各学期に進路志望調査を実施するとともに、２・３年生は担任団を中心に期日を設定し進路検討会を実施した。
3	生徒支援の確立	B	文化系の生徒に対する特待生制度については、在校生が所属する校外のクラブや各種教室等を訪問したり、オープンキャンパスで案内したりした。年々、学校生活や学習において支援を必要とする生徒が増加してきているが、現在のところ担任、養護教諭、カウンセラー及び保護者との連携により支援ができている。次年度は支援が必要な生徒への対応がよりしっかりとできるよう、全教職員を対象とした特別支援教育に関する研修を実施する。
4	地域貢献の推進	A	本年度も熊本城マラソンのボランティア活動をはじめ、マチノガッコウ2023、届けよう服のチカラプロジェクト、フードバンク熊本、阿蘇の植林活動、募金活動などを行った。また、尚絅英語暗唱大会や熊本ゼミナールと共催の英語活動のイベントを実施したり、地域等からの依頼により、吹奏楽部、合唱部、ギター・マンドリン部、バトン部等が演奏や演舞に出向いたりするなど、年間を通して地域活性化に貢献した。
5	個性豊かな生徒の獲得	B	生徒による学校紹介動画や説明会等のチラシの作成、LINEの開設、本年度リニューアルしたスクールガイドや本校生徒の活躍を学校ホームページやその他の広報媒体を通しての魅力発信、年末の進学塾個別訪問や近隣の小学校訪問等を行い生徒募集に努めた。目標とする中学30名、高校220名の確保は達成できなかったが、４年振りに中学が20名、高校が200名を超え、令和６年度の入学生は中学21名、高校203名となった。

自己評価　令和５年度　尚絅中学・高等学校 学校評価　5-2

		評価の観点	具体的な目標・施策	評価	成果及び課題
教育の質向上	国際共通語である英語力の向上	全校生徒の英語力の向上	中高一貫コース英検取得率目標 中学3年卒業時3級100%、準2級50% 高校3年卒業時2級40%、準1級10%	B	学力格差があるため習熟度やＴＴでの授業を行って対応しているものの、本年度は全てにおいて目標達成はできなかったが、不合格生徒も合格点に近い点数であった。
			総合進学：GTECスコア卒業時690点以上50% 特別進学：GTECスコア卒業時960点以上50%	B	達成率は総合22%、特進43%。生徒によって英語力向上への意識の差が見受けられるので、こちらの働きかけの工夫が必要である。
		英語教員の指導力の向上	指導力向上のための外部研修会参加の促しと研究授業等の充実を図る。	A	県私学教育研修会をはじめ、業者の英語指導研究会や予備校の授業研修会等に参加した。また難関私立大学の入試問題を解くことで授業内容の充実を図った。
		中長期留学制度の確立	世界情勢を踏まえながら海外交流校を開拓する。	A	社会のグローバル化により英語学習の早期化、海外短期留学の低年齢化もあり、本校独自の中長期留学制度の検討を開始するとともに、ニュージーランドでの語学研修を行った。
	国際交流プログラムの充実	姉妹校や交流校との交流促進	交流校との繋がりの復活と訪問時期を見据えた交流促進を行う。	A	姉妹校との交流促進として令和5年8月に韓国蔚山市の鶴城女子中学校を生徒18名・教員3名が訪問し交流を行った。また、中国、アメリカ、香港からの交流団を受け入れた。
		交換留学制度の確立	交換留学制度の確立を目指し、留学規定の作成と受け入れ先の開拓を開始する。	B	尚絅大学・短期大学部における留学規定、留学規定を策定している先進校の規定及びEIL・WYSからの情報等を収集し、本校独自の留学規定の作成に取り掛かった。
	課題解決能力や創造力を育む探究教育の推進	総合的な探究の時間の充実	総合的な探究の時間やLHRの年間スケジュールを作成し内容の充実に努める。	B	学年によっては年間計画を立て学期毎に見直しを行っているが、学年・コース・クラスによって総合的な探究の時間の内容が異なることから、今後３年間を系統立てた探究学習の計画を立てることが必要である。
		インターンシップなどの校外活動の充実	総合進学コースにおける校外活動の計画を見直し、フィールドワークの充実を図る。	A	インターナショナルエアアカデミー福岡校での実践的な礼法・マナー研修は確実に成果があった。また、看護師体験、保育士体験などを実施することで生徒の進路実現に繋げることができている。
		企業と連携したプロジェクト型探究活動の推進	地元企業と連携した商品開発などプロジェクト型探究活動を推進する。	A	高校３年生のフードデザイン選択者35名が「ゆめマート熊本」とコラボし商品開発を行い、「ケバブサンド」と「おにぎらず」の２商品を県内の５店舗で販売した。
		探究学習の成果発表会の実施	各コース毎の探究学習の成果を発表する機会を計画し実施する。	A	各コース、グループ又は個人でそれぞれの探究学習の成果をプレゼンテーションした。発表の場を設けることで発表者はもとより聞く側も勉強になっている。
	教育力の向上	専門教科並びに進路指導力の充実	外部研修制度の積極的活用と研修会への積極的な参加を促す。	B	県教育委員会主催の教育課程研究協議会や私立学校一斉研修会へ各教科で参加し教育力の向上に努めた。また、各大学説明会に高校３学年部を中心に参加し進路指導の充実を図った。
		情報共有方法の検討と教職員の連携強化	情報共有の効果的な方法を検討することで教職員の連携を強化する。	C	情報の共有が不十分であり、情報が活かされていないところがあったので、情報の発信と情報の受容、情報の理解と情報の共有の在り方の検討が必要である。
品性があり社会に貢献し得る生徒の育成	中学校における将来像を掘り起こす指導	表現力育成のための活動の実施	プレゼンテーション、ディスカッション、ビブリオバトル、ディベート、弁論など、教科を横断した表現力の育成に繋がる活動を実施する。	A	プレゼンテーションやディスカッション等の活動を実施し、ディベート甲子園、英語ディベート（調査型・即興型）に参加して入賞を果たした。
		「コトバノチカラ」プログラムの充実	グローバル教育と環境教育を結び付けた本校独自の取り組みを充実する。	A	「コトバノチカラ」育成計画に基づき、弁論、スピーチ、プレゼン等に取り組み、シンガポール修学旅行では英語によるプレゼン、学習発表会では英語スキットと環境教育のプレゼンを実施した。
		進路や将来について考える機会の確保	学年毎のテーマに基づき、講演会、集会などを実施し、将来を考える場を設ける。	B	人権講話、進路講話、食育講話、環境講話など、特別講師を招いてのレクチャーを計画的に実施することができた。
	総合進学コースにおける尚絅大学・短期大学部への進学率40%	尚絅大学・短期大学部進学希望者への指導強化	尚絅大学・短期大学部の志望者に対する学部別説明会・個別相談会等の実施により理解を促し、明確な意志と基礎学力を持った生徒を進学させる。	B	高校1年生は9月14日、高校2年生は8月31日に尚絅大学・短期大学部の学部学科説明会を実施し、生徒たちは学部学科への理解を深めることができた。本年度の尚絅大学・短期大学部への進学者率は34%。
		外部進学を希望する生徒への指導強化	外部進学を希望する生徒対象に特別ゼミ、朝課外、放課後課外等を充実させ、推薦入試並びに一般入試に対応できる能力の養成する。	A	高校３年生の課外については、できるだけ生徒の進路希望に合致するように教科の割振を工夫した。次年度からは共通テストに対応するため「情報」の課外を実施する。
		生徒・保護者への進路情報の提供	生徒と保護者対象の尚絅大学・短期大学部説明会と学部・学科別の個別相談会を開催する。	A	本年度初めて中高大連携事業の一つして、10月7日(土)に実施した高校1･2年生保護者会の中で、尚絅大学・短期大学部の学部・学科説明会を開催した。
	総合進学コースクラスの特色の明示	進路希望別クラスのカリキュラムの検討	進路希望別クラスの特色あるカリキュラムや授業内容を検討し、年間計画と次年度以降の学年毎の内容を明示する。	B	総合進学コースの教育課程に一部修正を加えた。また、クラス別の授業内容についても各教科で検討し、次年度以降の対応も画策した。
		進路指導カリキュラムの検討	総合的な探究の時間の各コース・学年の担当者を配置し、系統立てた計画表を作成する。	A	学年毎に年間計画を立て、学期毎に見直しを行いながら、総合的な探究の時間を利用して進路学習を実施し、将来の進路に必要となるスキルを磨くとともに、知識を深め見聞を広げた。
		検定試験や資格習得への指導の実施	早期に検定試験や資格習得を意識させ、担当者を配置した指導を実施する。	A	英検、GTECともにテーマに沿ったライティング問題があり、単語力、文法上の正確さや論理性が問われるので、日常的なライティング指導を行った。
		進路選択別の発表の機会を設定	学びをアウトプットする機会として、進路選択別の発表会を計画し実施する。	B	探究学習プログラム(MYLSIL)を活用して、各クラスのＬＨＲの中で進路についての情報交換や将来についての話し合いを実施し、各グループ内において一人一人が発表を行った。
	特別進学コース・一貫コースにおける国公立大学及び難関私立大学の合格実績向上	受験に対応したカリキュラムの見直し	受験に対応したコース毎のより合理的なカリキュラムの見直しを行うとともに、２学期以降の取り組みを再検討する。	B	カリキュラムの見直しを行ったが早急な改善は必要なしと判断した。ただし、個別試験対策については他コースも含めて対応を検討し教員の割り振りを変更した。
		中学３年間の進路意識の向上	中学３年次より国公立大学、難関私立大学の情報を提供し志望校として意識させる。	B	中学3年生は2学期から数学と英語は高校の内容を開始しているので、その際に大学の入試情報や学習の仕方などを提供し、進路意識の向上を図っている。
		受験科目を早期に絞らせない指導の実施	受験科目を早期に３科目に絞らないよう、授業担当者全員で共通認識を持った指導を行う。	A	3学年とも各学期の初めに進路志望調査を実施した。また、担任団を中心とした進路検討会を2年生は3学期期末考査の放課後2日間、3年生は6月・11月と共通テスト後の3回実施し共通認識を図った。
		国公立大学、難関私大の受験を意識した講座の設定	夏期講座や冬期講習の充実を図るとともに、早期に国公立大学、難関私立大学の受験を意識した講座等を行う。	A	本年度は勉強合宿を4年振りに1泊2日で実施した。また、夏期・冬期課外では受験を意識した問題等をじっくりと時間をかけて取り組ませることができ、学力向上に繋がった。
			国公立大学、難関私立大学への合格を目指し、教員間での問題研究を実践する。	B	各教科で国公立大学の個別問題や難関私立大学の問題について研究を行い、生徒の進路実現に貢献した。
	進路指導の充実	進路指導部のサポート体制の見直し	進路指導の充実を図るためチューター制度や自習室確保等の環境面の見直しを行う。	A	生徒の進路を実現するため、2次対策については本年度から総合・一貫・特進全クラスをまとめ、国数英３教科は出願先で2～3クラスに分けて担当者を決めて実施した。
		コース毎の模試分析会の実施	コース毎の模試分析会、教科担当者会を実施し、効果的な教科指導の在り方を検討する。	A	2年生は3学期期末考査時に、3年生は6月・11月と共通テスト後に模試分析を基に進路検討会を実施し、生徒の進路実現に向けた教科指導の在り方を検討した。
		中学校対象の進路説明会の充実	中学段階での生徒、保護者対象の進路説明会を充実させ、進路意識の向上を図る。	B	生徒は外部から講師（山本行文氏）を招き進路講演会を行った。保護者については学級懇談会時に進路に対する情報を提供し、進路意識の啓発を行った。

		評価の観点	具体的な目標・施策	評価	成果及び課題
生徒支援の充実	奨学金制度の告知と特待制度の充実	特技特待及び学力特待SSの内容の検討	部活動顧問によるヒアリングを中心とした特技特待制度及び学力特待SSについての成績基準と特待内容等の検討をする。	B	特技特待制度、学力特待SS制度の成績基準と特待内容等については現状を維持し、志願者の増加に努めることが必要である。
		文化系特待生への支援	生徒が在籍している習い事教室等文化系の生徒の掘り起こしの実施と特待制度の告知を行う。	B	在校生が所属する校外のクラブや各種教室等の所在地と指導者に関する情報を基に、訪問や資料送付による広報活動を行った。
	生徒支援体制の確立	生徒情報の在り方の検討	支援等を必要とする生徒情報共有の在り方の工夫と内容の検討を行う。	B	生徒支援体制を確立するため情報共有研修を実施するとともに、生徒情報を共有フォルダにて管理し、随時教職員が確認できるようにした。
		支援が必要な生徒への指導力強化	カウンセラーとの協力体制の継続と専門的な知識を持つ職員の育成を推進する。	B	カウンセラーとの協力体制はしっかりとできている。次年度は支援が必要な生徒への対応をしっかりと行えるよう、全教職員を対象とした特別支援教育に関する研修を実施する。
	育友会・後援会・同窓会との連携の確立	HP、Classiなどでの情報配信	生徒の学校生活の状況をHP、Classiなどで配信したり、Zoomによるリアルタイム配信を行ったりして連携を強化する。	A	学校行事や委員会活動の状況、部活動の大会結果、各種大会・コンクールでの活躍等をスピーディーに配信することができた。
		在校生徒による現状報告会等の実施	育友会や同窓会と連携した現状報告会や本校の今後の在り方等のディスカッションを実施する。	C	本年度、在校生と育友会及び同窓会と連携した現状報告会を実施することはできなかった。今後できなかった原因を明確にし、実施に向けて検討する。
	生徒会活動や部活動の充実	同好会、愛好会の規定等の見直し	生徒会議による同好会、愛好会の規定等の見直しを行う。	B	本年度、部員が集まらず活動ができていない百人一首部、日本舞踊愛好会は、次年度現状のままであれば廃止とする。また、部員が揃わず活動が厳しい同好会・愛好会についても今後検討する。
		自立した組織づくりへの指導	自立した生徒会活動のための組織づくりの指導・助言を行う。	B	他校の学校行事を観に行ったり、他校と連携した私学合同オープンスクールに参加したりして活動の仕方等を学び、本校の行事の企画に活かした。
地域貢献の推進	ボランティア活動、SDGs等の活動支援	年間計画の作成	LHR計画と併せた年間計画を作成し、職員及び生徒への周知を行う。	B	年間計画の作成はできなかったが、東京のNPO団体せいほと連携してマラウイの小学校の給食支援のためのコーヒー販売を実施した。また高校2年生がLHRの時間に学校周辺の清掃活動を実施した。
		ボランテイア活動の内容の精査	ボランテイア活動の内容の精査を行い、計画的に実施できるものを全校生徒へ事前配信し、生徒の主体的な参加を推奨する。	A	担当教員で内容の精査を行い、これまで口頭で行っていた案内をClassiで全校生徒に案内するとともに、内容についても2号館ロビーに掲示するようにした。
		ボランテイア活動参加者の状況配信	ボランテイア同好会の取り組みや参加者の状況についての情報配信を行うことで活動を推進する。	A	本年度実施したボランティア活動（届けよう服のチカラプロジェクト、ウクライナ難民支援募金、能登半島地震被災地募金、熊本城マラソン、フードバンク熊本、その他）について情報を発信した。
		SDGsに対する取り組み	コロナ禍のため、校内の清掃活動等、身近な環境への取り組みの活動を実践する。	B	中高一貫コースの高校1年生が白鷺電気工業株式会社（くまもとSDGsアワード牽引部門入賞）を訪問し、SDGsに関する学びを深めるとともに、自らの勤労観についても考える機会となった。
	地域行事への積極的参加	塾、地域の自治会、小中学校との連携	塾、地域の自治会、小中学校と連携を取りながら行事参加への計画案を作成する。	A	熊本ゼミナールと共催の英語活動イベントを実施したり、地域等からの依頼により吹奏楽部・合唱部、バトン部、ギター・マンドリン部等が演奏に出向いた。
		探究活動の社会的な活動への発展	探究活動への生徒の積極的な参加を推奨し、企業や地域とのコラボ等の実現に向けて検討する。	A	企業訪問や商品の共同開発、地元商店街の活性化や熊本の水質保全を目指す探究プログラムへ参加した。
個性豊かな生徒の獲得	中学校入学者30名高等学校入学者220名の確保	計画的な訪問活動	従来の訪問活動を見直し、広報部を中心に新しい策を検討する。	A	訪問活動マニュアルを作成し、訪問活動前には全職員を対象とした研修を開催した。併せて、先方に渡す資料の改善も行った。令和6年度の入学者数は、中学生21名、高校生203名。
		インターネット媒体の活用	動画配信、YouTube等のインターネット媒体を積極的な活用と迅速な情報発信を継続する。	A	新たにLINEを開設し1学期から運用を始め、主に説明会日程の告知に使用した。また、動画配信による情報発信は継続した。
		本校の魅力の継続的な発信	受験生個人や進学塾等から得た情報を基に、本校の魅力を継続的に発信する。	A	スクールガイドを中心に学校ＨＰ、その他の広報媒体を通して本校の魅力を継続的に発信した。また、年末には進学塾を個別に訪問し、本校の魅力を伝えるとともに情報交換を行った。
		外部会場や校内の説明会の内容の検討	説明会の内容を見直し改善することで志願者及び入学者の増加に繋げる。	A	説明会では在校生自らが情報発信となるよう内容を工夫した。結果、参加者アンケート回答からも好評を得た。次年度もこの取組を継続する。
		受験生・入学生の学力格差への対応	学力格差を防ぐため一定のラインを維持するとともに、その分析結果を入試検討会議に反映する。	B	本校の建学の精神である「智と徳を兼ね備え社会に貢献し得る女性の育成」を目指し、これまでの入試データを基に一定のラインの維持を行った。
	特待生制度を活用してスポーツ、芸術活動等に優れている生徒の確保	広報戦略案の策定	部活動顧問と広報部の連携による広報戦略案を策定し、公立中学、クラブチーム、習い事などの担当者との繋がりを強化する。	B	本年度の広報戦略については、これまで行ってきたことに工夫を加えたこともあり、ある程度の結果は出たものの定員確保には至らなかった。原因を追究し次年度に改善する。
		ホームページ、YouTube等のWeb関係の充実	生徒募集活動に繋げるため、在校生の校内外での活動や活躍等をホームページ、YouTube等のWeb上で積極的に情報提供する。	B	学校ＨＰ、YouTube等のWebを活用して、学校行事や委員会活動の状況、部活動の大会結果、各種大会・コンクールでの活躍等をスピーディーに配信することができた。
		習い事やｸﾗﾌﾞﾁｰﾑでの活動種目の生徒募集の強化	書道、バトン、水泳、バレエなど、入学後も習い事・クラブチームとして継続できる種目についての情報収集を行い生徒募集活動へ反映する。	B	各部活動の顧問を中心に、在校生が所属する校外のクラブや各種教室に出向き、情報収集と生徒募集活動を行った。
		特技特待生勧誘活動の検討	公立中学の部活動における外部指導者の影響を考慮した特技特待生勧誘活動の検討を行い、特技に秀でた生徒を獲得する。	B	公立中学校における部活動の外部指導者制度が固まっていないこともあり検討までは至らなかったが、学校によっては外部指導者との連携も必要であり、対策が必要である。
	転退学者の削減	外部関連機関との情報共有と研修の推進	生徒の困り感等をなくすために必要な外部関連機関の情報や研修案内等を教職員及び保護者へ確実に連絡する。	B	悩みを抱える生徒の対応については、担任、養護教諭及びカウンセラーが真摯に対応しており、保護者に外部関係機関の情報を提供することはなかった。
		教職員間の情報共有体制の見直し	教職員間の情報共有を円滑に行うための施策を検討する。	B	生徒に関する情報共有研修は実施できたが、その生徒に対する具体的な対応や支援方法については、教職員の特別支援教育に関する学びを深める必要がある。
		時代に合った校則の見直し	生徒を中心に時代に合わせて見直すべき校則の検討をさせる。	B	校則については、柔軟な対応に変更してきているが、まだ生徒と教職員に温度差が見受けられる。不易と流行を大事にし、生徒、教職員、保護者の三者による検討が必要である。
	専願生の受験者数の増加	広告のイメージの一貫性を維持	広告のイメージの一貫性を維持し、学校ＨＰやＳＮＳ、その他の広告媒体の効果的な活用方法について研究する。	A	スクールガイドを中心に学校ＨＰ、その他の広報媒体に本校の魅力を一貫したイメージを反映して情報発信するとともに、本年度は新たにLINEを開設し運用した。
		塾や学校などに重点を置いた活動を検討	今後人口が増えるエリアや、本校近隣にある塾や学校などに重点を置いた広報活動を行う。	A	菊陽町、合志市、大津町、御船町、益城町など人口増加エリアにある学校及び塾ついては管理職（主に校長）が出向き、広報活動と情報把握に努めた。
		在校生への広報活動・情報発信	生徒会を中心にした在校生からの、学校ＨＰ、YouTube等のWeb上での情報発信について研究する。	B	在校生への広報活動はClassiで行った。生徒会からインスタグラムを開設してほしいと要望は出ているが、管理面（運営責任者、個人情報保護等）の心配もあり実施までは至らなかった。
		中高のキャッチフレーズの検討	世間への尚絅の認知度の広げるため、あらゆる広報活動で使用できる尚絅中学・高等学校のキャッチフレーズを検討する。	B	現在は「県内唯一の女子の総合学園」「歴史と伝統」「私もおばあちゃんもお母さんも尚絅」を使用している。今後あらゆる広報活動で使用できる中高のキャッチフレーズを検討する。

学校生活に関して「生徒」「保護者」にアンケートを実施しました。

○：よくあてはまる・ややあてはまる　　●：あまりあてはまらない・全くあてはまらない

生徒による評価			
1	尚絅に入学して良かった	○ 85 %	● 8 %
2	友人と仲良く楽しい学校生活を送っている	○ 96 %	● 2 %
3	学力向上を目指して積極的に取り組んでいる	○ 89 %	● 6 %
4	学校行事が充実している	○ 81 %	● 15 %
5	しつけ・礼法教育に積極的に取り組んでいる	○ 92 %	● 4 %
6	部活動が盛んである	○ 92 %	● 1 %
7	進路指導が適切に行われている	○ 88 %	● 4 %
8	施設・設備が充実している	○ 96 %	● 1 %
9	環境美化に取り組んでいる	○ 90 %	● 3 %
10	悩み等が生じた際に教育相談を行っている	○ 71 %	● 9 %

生徒による評価の総括

令和５年度は、新型コロナウイルス感染症が５月に「５類感染症」に移行し学校教育活動がほぼ制限なしで実施することができるようになったこと、そして、生徒・教職員ともに「挑戦」をテーマに取り組んだこともあり、生徒の学校生活に対する満足度の向上は図れたと思料する。

本年度の評価を分析すると、昨年度から満足度が下がったのは、６の「部活動が盛んである」の１ポイントのみで、他の項目は全て向上している。特に昨年度満足度が低かった１の「尚絅に入学して良かった」と７の「進路指導が適切に行われている」については、満足度がそれぞれ９ポイント、５ポイント上がり、85%、88%となっている。

課題は、10の「悩みが生じた際に教育相談を行っている」の満足度が約７割しかないことである。よく分からないと回答した生徒が20%いることも原因の一つではあるが、その背景には、生徒が相談できる先生の少なさや相談できる場所が限られていることも考えられる。現状の改善策としては、生徒たちに悩みを相談する先生は担任、学年の先生に限らず、自分が相談し易い先生で良いといことを伝えること、そして、担任はもとより授業担当者が日々の学校生活の中で、生徒の表情や言動等から気になることが見受けられる際に、生徒の心に寄り添った声かけ等を行うことである。

保護者による評価			
1	尚絅に入学させて良かったと思う	○ 91 %	● 7 %
2	友人と仲良く楽しい学校生活をすごしていると思う	○ 94 %	● 4 %
3	学力向上を目指して積極的に取り組んでいる	○ 80 %	● 17 %
4	学校行事が充実している	○ 81 %	● 15 %
5	しつけ・礼法教育に積極的に取り組んでいる	○ 89 %	● 6 %
6	部活動が盛んである	○ 85 %	● 7 %
7	進路指導が適切に行われている	○ 82 %	● 10 %
8	施設・設備が充実している	○ 96 %	● 2 %
9	環境美化に取り組んでいる	○ 87 %	● 3 %
10	悩み等が生じた際に教育相談のできる環境が整っている	○ 66 %	● 14 %

保護者による評価の総括

生徒同様に本年度の評価を分析すると、昨年度から満足度が下がったのは、３の「学力向上を目指して積極的に取り組んでいる」の２ポイントのみで、他の項目は全て向上している。特に昨年度満足度が低かった１の「尚絅に入学して良かった」と７の「進路指導が適切に行われている」については、満足度がそれぞれ16ポイント、５ポイント上がり、91%、82%となっている。この背景には、教師が常に「生徒を伸ばす・育てる」という姿勢を忘れず、過不足のない指導・支援を心がけていたからだと思料する。

課題は生徒同様に、10の「悩みが生じた際に教育相談のできる環境が整っている」の満足度が約７割に届かないことである。よく分からないと回答した保護者が18%いることも原因の一つではあるが、その背景には、学校が行っている教育相談の状況や学校の環境等が伝わっていないことが考えられる。次年度は、育友会総会や各学年保護者会等を介して学校の現状等の説明を行い、保護者の満足度の向上を図りたい。

保護者が求める尚絅の学校像は、安心安全な学校、生徒や保護者の心や思いを第一に考える学校、そして女子校として躾や生活指導、社会的マナー指導がしっかりとしてもらえ、学力向上と進路実現が叶う学校だと思料する。

学校評価委員（保護者の代表・同窓生の代表）に評価をお願いしました。

学校評価委員会からは今年度も温かいご意見をいただいた。

- 本年度の生徒及び保護者のアンケートでは、昨年度満足度が低かった「尚絅に入学して良かった」の結果が、生徒は＋９ポイント、保護者は＋１６ポイントと大幅に向上している。この背景には、先生方の手厚い指導と支援があるからだと思う。また本年度、文化祭や体育祭を観覧したが、当日の生徒たちのきびきびした動きや満面の笑みからも学校生活が楽しいということが伺えた。「進路指導が適切に行われている」の結果についても、生徒・保護者ともに＋５ポイント向上している。これは進路指導部のサポート体制の見直しと学年での進路検討会の充実があったからだと思われる。次年度も生徒を「認め・ほめ・伸ばす」教育を実践してほしい。
- 保護者の「悩み等が生じた際に教育相談のできる環境が整っている」の満足度が低いが、これは学校からの説明のとおり、学校の取組等が保護者に伝わっていないことが考えられるのではないか。個人的には、子供のことで担任に相談したら、カウンセラーに直ぐに繋いでくださりとても助かった。中学・高校時代は難しい年頃なので、子の思いと親の思いに相違もあるので、常日頃から親子の会話を行うことが大切だと思う。
- 多くの保護者から、尚絅は教育環境が素晴らしいことはもちろんのこと、先生方が熱心に指導してくださるので入学したということを聞いた。実際、孫が入学し卒業したが、孫も「尚絅はとても良い学校だった。尚絅で良かった。」と言っていた。
- ボランティア活動にも熱心で、十分な社会貢献ができていると感じる。また、尚絅の生徒は本当に心優しい生徒が多く、交通マナーもしっかりとしていると感じている。
- 入学式、卒業式に参加しているが、新入学生と比べると卒業生の礼儀作法はとてもよかった。これは、授業で「茶道」「華道」「装道」があっているからだと思う。新入学生も卒業時には成長した姿が見られるので嬉しく感じる。社会に出て、女性としての目配り、気配り、心配りができるのは素晴らしいことである。
- 転退学者の削減の評価が３項目ともＢ評価である。転退学の理由も様々であり、その都度学校としての対応もしっかりとなされているとは思うが、原因を明確にした上での対応の改善が必要だと思う。

■総合評価

令和５年度は、コロナ禍の感染防止対策の緩和により、学校教育活動をほぼ制限なしで実施することができ、生徒の学校生活に対する満足度の向上は図れた。このことは昨年度の課題であった学校生活に関する生徒及び保護者アンケートの「尚絅に入学して良かった」と「進路指導が適切に行われている」の満足度の向上から見て取れる。

しかしながら、教育の質向上については、それぞれの分野で各々がしっかりと取り組み結果は残しているものの、教職員間の情報の共有が不十分で組織的な活動ができておらず、生徒の個々のニーズに合った教育を提供できたとは言い難い。令和６年度は情報の発信と情報の受容の在り方の検討を行い、教育の質を向上させる有機的な組織となり、生徒の英語力の向上と総合的な探究の時間を充実させることが必要である。

また、本校の志願者数・入学者数についても、学校ホームページの充実や学校案内パンフレットの改善を行ったり、生徒による学校紹介動画や説明会等のチラシを作成したり、LINEの開設や近隣の小学校、県内の中学校及び学習塾の訪問回数を増やしたりしたが、目標としていた入学者数の中学校30名、高等学校220名は達成できなかった。令和６年度は目標を達成するため、学校訪問する地域や時期・回数などを見直したり、在校生を活用したオープンキャンパスを実施したりするなどの広報戦略の改善を行うことが必要である。

■令和５年度の課題を踏まえた令和６年度の改善方法

① 教育の質向上

生徒の能力を最大限に引き出すための教員の指導力向上を目指し、専門教科の指導力だけでなく、グローバル時代を生き抜く生徒を育成するために、教員自身が視野を広げ、教育力の向上を図る。

② 品性があり社会に貢献し得る生徒の育成

生徒の自己肯定感やリーダーシップ能力を育む教育活動を充実させ、生徒が自分自身を見つめ自分にふさわしい生き方ができる生徒を育成する。また、一人の人間、一人の女性として社会と時代の動きに目を向け、将来について自ら考える生徒を育成する。

③ 生徒支援の充実

生徒の学業上のサポート、カウンセリングや心理社会的な支援、健康管理や進路指導など、生徒が学校生活や学習において必要とする様々な面での支援を充実する。また、支援が必要な生徒への教職員による支援と指導力の向上を図る。

④ 地域貢献の推進

地域に開かれた学校として地域社会との密接な関係を築く。また、地域の発展や社会の向上のためにボランティア活動や地域行事等へ参加し、社会のニーズに応じて環境活動や地域社会に積極的に参加する生徒を育成する。

⑤ 個性豊かな生徒の獲得

県内唯一の女子総合学園としての魅力化と発展を図るため、尚絅大学・短期大学部との連携による教育力の向上に取り組みながら、中学・高等学校の魅力発信と広報活動を行い、令和７年度入学者数、中学校30名、高等学校220名を達成する。

⑥ その他

学校教育の充実は「力量の高い教師集団」と「好奇心旺盛な生徒集団」と「学校を温かく見守ってくれる応援団（育友会や花桜会）」の三者がうまい具合に機能し一体化した時に実現すると言われるが、その中でも力量の高い教師集団の存在は大きい。本年度からコロナ禍には中止されていた教職員のスキルアップ研修や教育に関するイベントも制約なく実施されるようになった。生徒の学びの深化と進路（夢）実現のためには、全教職員が学ぶことを忘れず、教育力の向上に努めることが必要である。研修会等への積極的な参加を呼びかけ、教師自身のスキルアップに努めていきたい。